

セシリア・プガ

「**パラシオ・ペレイラ**」 Santiago, Chile

設計=セシリア・プガ;パウラ・ベラスコ、アルベルト・モレット

二律背反と過去のパラドックス フランチェスコ・ダルコ

参照 | 本誌 pp.2-25

ルイス・ペレイラ・コタポス(1835-1909)はチリの企業家で政治家だった。外務大臣のほかさまざまな重職に就いた。企業家としては、例えばブドウ栽培・ワイン製造会社ピニャ・サンタ・カロリーナの創作者で、サンティアゴに同名のワイナリーを建設し、エミリオ・ドワイエール(1847-1918)がファサードをデザインしている。ドワイエールはパリのエコール・デ・ボザール国立高等美術学校で専門教育を受けた。1890年にチリに渡り、裁判所(1905-30)をはじめ重要な作品を多く実現した。サンティアゴに活動の場を移したドワイエールは、リュシアン=アンブロワーズ・エノーが歩んだ道を進んだ。19世紀には、エノーのようなフランスのボザール出身者の貢献を通して、自分の経済的な成功を称え社会的重要性を表現することに熱心な建築主たちによって、パリで教育された建築様式がエスペラント語のように世界各地に適用されていった。1909年にルイス・ペレイラが死去した後、ワイナリーに名を残す妻のカロリーナ・イニゲス・ビクー



修復後の外観全景



同、正面ファサード

ニャは、サンティアゴ中心部の邸宅に住み続け、ここに掲載した写真が物語るように、一族の富裕さを見せつける舞台として、そこに暮らした。後年、パラシオはサンティアゴ大司教区の所有となり、後に教育省に貸し出された。アウグスト・ピノチェトが1973年にクーデターを起こすまで学生たちで溢れていたが、後に不動産会社に売り渡された。後年、チリ政府が買い上げて国定記念建造物(1981)に指定したものの、長い間放置されてきた。2012年になって、その2年前にチリ独立百周年記念のために発表された政策枠組みの一環として、パラシオの修復・再利用の設計競技が告示されると、31の建築家グループが参加した(詳細は以下を参照されたい。A. Crispiani ed.,

Concurso Palacio Pereira, Arq, Santiago 2014)。2012年12月にセシリア・プガが、チームを組んだパウラ・ベラスコとアルベルト・モレットとともに設計競技に優勝し、トマス・プラドのチームとクリスティアン・ウンドゥラガのチームがそれぞれ2等と3等選ばれた。パラシオ・ペレイラの修復は2016年に始まり、このたび工事が終わった。

2020年の国民投票の結果、チリはピノチェト独裁期に制定された現憲法を破棄し、新憲法を制定することが決まった。自由選挙によって2021年には憲法制定議会が設置され、1年をかけて新憲法を起草し、それを新たな国民投票にかけることになっている。設計競技の時点では、パラシオ・ペレイラを文化省の本部として使うために



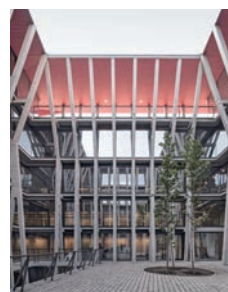
中庭よりボルタージュ越しに交差点を見通す



中庭を構成するトレススル群



中庭を巡る回廊



中庭

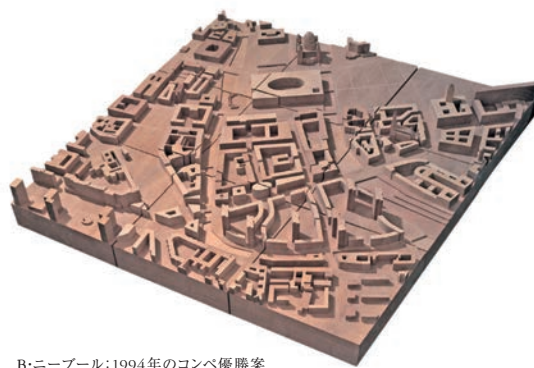
無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2021 Arnoldo Mondadori Editore
©2021 Architects Studio Japan

ベルリン王城再建 セバスチャン・レデック

参照 | 本誌pp.40-42

1989年、ベルリンの壁が11月9日に崩壊した直後に、ベルリン王城再建の最初の提案が浮上したが、直接的な動きにはつながらなかった。当時は、1976年から王城の跡地を占めていたDDR(ドイツ民主共和国)の共和国宮殿を取り壊すことが、優先政策に上ることもなかった。DDR議会が置かれ、国家の顔となる場だった共和国宮殿は、東ベルリンのアイデンティティにとって深い意味を持っていた。1990年に、建物の深刻なアスベスト汚染が問題となったため、ベルリンで最初の自由選挙で選ばれた議会は共和国宮殿の閉鎖を決定した。

当時ベルリン市建設省都市建設局長だったハンス・シュティマンは、これほど重要な場所はより広い都市的文脈に組み入れ、再編し、新たな用途に合わせてコンバージョンすべきと判断した。この目的に向けて、1994年に連邦共和国とベルリン州が「都心・シュプレー島」国際アイデア・コンペを開催し、1,100人の建築家が参加した。同アイデア・コンペの規模には、この時期にベルリン都市再開発がいかに重要視され大きな国際的関心を集めたかが反映されている。プロポーザル案は千差万別だった。驚くべきことに、設計競技に優勝したのは当時ほぼ無名だったベルリン在住の建築家、ベルント・ニーブルで、巨大な矩形の近代建築を作り、共和国宮殿と同規模の楕円形の「都市の庭」^{シュタットホーフ}を設けることを提案した。「人民の家」と呼ばれた共和国宮殿を取り壊して、跡地に「都市の家」^{シュタットハウス}を建て、ホテル、大規模図書館、展示スペース、店舗を併設し



B・ニーブル：1994年のコンペ優勝案

た国際会議場施設として活用すべきとされた。その間に、「Förderverein Berliner Schloss(ベルリン城塞支援協会)」が結成され、ベルリン王城再建の激論に火をつけた。アイデア・コンペ開催の直前にあたる1993年に、王城再建の仮説は、寛大なスポンサー(鉄鋼工業製品企業ティッセンクルップ)のおかげで、ファサードのひとつを原寸大で暫定的に復元するかたちで実現された。これは[王城ファサードを]印刷した巨大な防水シートを足場に取り付けたもので、共和国宮殿の側に大きな鏡面スクリーンを設置することで、さらに存在感を発揮した。この措置が大騒動と激論を引き起こすと、ニーブルの設計案は忘れ去られた。

アスベスト除去工事が終わった1997年には、共和国宮殿——短期的なアート・インスタレーションが行われていた——は鉄骨構造と鉄筋コンクリート部材を残すのみとなった。建築家やアーティストにより建物を都市中心部の新しく唯一無二のものに改変するアイデアが多く出されたものの、王城再建の仮説は着実に前進していった。

2002年、長年にわたる交渉の末、17人の専門家と6人



K・マルヴェッツィ：2008年のコンペ2等案

の政治家で構成された専門家委員会はニーブルの計画案を恒久的に却下すると決定し、代わりに北、西、南面にバロック様式のファサードをもちドームを冠した王城を再建することを提案した。2002年7月にドイツ連邦議会により最終決議が行われ、議員の3分の2の多数が賛成した。こうして、再建方法の選択権は完全に政治家の手に握られるようになった。ノスタルジーの精神でなされたがゆえに誤ったメッセージを伝達するこの決定に、象徴的な性質を読み取る者は多かった。

再建計画は「ベルリン王城のフンボルト・フォーラム」と名付けられ、より広域的な再開発と、世界の文化を集めた博物館の2層分を非ヨーロッパ・コレクションの博物館(民族博物館とアジア美術館)に、さらに州立図書館、ベルリンに関する展示、「政治的・文化的反響の対話のためのフォーラム」としての公共空間、そしてバー、レストランに再編する事業が計画された。期待されたのは、フンボルト・フォーラムがこの場所の変転する歴史と建築的改変を映し出すことだった。新たな文化の館はできる限り広く博物館島とルストガルテンに向かって開き、ファサードの大部分を忠実に復元する代わりに、「過去ばかり見ているという印象を抱かせない」ことが望まれた。たしかに実現の困難な課題である。

「ベルリン王城のフンボルト・フォーラム」国際設計競技は、多岐にわたる機能的要件を定め、解釈の余地に一定の幅を持たせながら2008年に開催された。150案の応募が見込まれたものの、実際の参加者は85にとどまった。当初は40案の予定だったが、30案が選ばれて二次審査に進んだ。フランコ・ステッラの計画案が審査委員会の満場一致で優勝案に選ばれた。栄誉ある特別賞はベルリンを拠点とするクーン・マルヴェッツィ事務所に贈られた。彼らのプロポーザル案は、ドームをもたない組積造の



1900年頃のベルリン王城



共和国宮殿、1986年5月

「粗野な構造」を建て、屋外広場をつけるものだった。第3等にはハンス・コルホフ案などが選ばれた。

ステッラの提案がヴィットリオ・マニャーゴ・ランブニャーニを議長とする審査委員会を説得できたのは、その明確で一貫した直交する構成のためである。審査員たちが特に評価した内部通路(シュロス・パサージュ)は、建物を南北に横切り、他の2つの中庭と連絡する通路だった。こうして王城の2つの門は幅広い「通廊」への入口になった。新しい東ファサードはステッラの建築スタイルの特質を明確に帯びており、当初は硬直して厳格すぎると感じた者が多かった。設計競技に続いて、ベルリン城塞支援協会が豪華な装飾を伴うバロック様式のファサードを再建するために、大規模な国際的ファンドレイジング・キャンペーンを展開した。キャンペーン・カタログには支援可能な大小の箇所が一覧化された。このキャンペーンのおかげで、2019年8月までに9,600万ユーロが集まった。

「ベルリン王城のフンボルトフォーラム」が発注した工事は、2010年に財政難を理由に一時計画中断に追い込まれたものの2012年に着工し、2021年に公式落成式が予定されている。

ー

フランコ・ステッラによるベルリン王城再建プロジェクトの紹介については、2010年12月の『CASABELLA』796号も参照されたい。

[邦訳参照]

ー太田尚孝「再統一後のベルリンにおける都心改造に関する研究」筑波大学システム情報工学研究科、学位論文、2010年

ー太田尚孝、大村謙二郎、有田智一、藤井さやか「再統一後のベルリンにおける都心改造に関する研究——「都市改造マスタープランPlawerk Innenstadt」を巡る議論とプロジェクトの実現に注目して」『日本都市計画学会都市計画論文集』45-4、2010年10月、pp.109-114

ベルリン王城の再建と新築 フランコ・ステッラ

参照 | 本誌 p.51

新しいベルリン王城はバロック様式とモダニズムの統一的建筑物で、「世界の諸文化が会う場」として構想された。それがフンボルト・フォーラムである。これは復元された古いものと創造された新しいものからなる、異なる場の集合体である。王城は17世紀から18世紀にかけてアンドレアス・シュリューターとヨハン・F・N・エオザンダーにより改築され、19世紀にフリードリヒ・アウグスト・ステューラーが設計したクーポラ——シンケルの言葉を借りれば「ヨーロッパ・バロック建築の傑作」——が載せられた。現代の増改築部は、この建物の起源に立ち戻った理想形の完成と見なされた。様式上の諸問題にもかかわらず、新しい部分は古い部分と一緒に生まれたように見え、もは

や以前か以後かを問うことが無意味になっている。再建の対象となったのはバロック様式の王宮のファサードと、クーポラの求積法に関してのみだった。加えて中庭(ホーフ)の再建と、西中庭(エオザンダーホーフ)に面する3つの大門から伸びるファサード、クーポラのファサードが再建された。

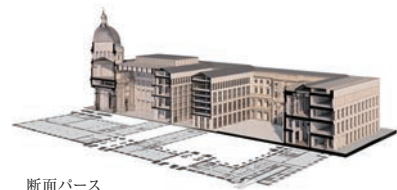
新築部分は5つのヴォリュームから構成される。1つは後期ゴシックからルネサンス期の王城の外側部分に、それ以外は元のエオザンダーホーフに建てられた。シュブレレー川に面したヴォリュームは再建部分の「第4ウイング」と位置付けられ、イタリアのルネサンスとバロックのパラッツォ建築に倣って、王城を統一的な宮殿に改変しようとしたシュリューターの当初の構想を実現するものである。このヴォリュームの規模と造形は、再建された3つのウイングと同様である。窓のある開口部の特例的な広さと奥行き



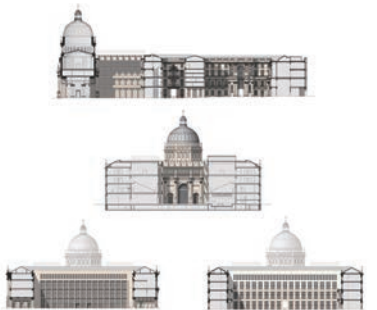
西側の王城広場より見る



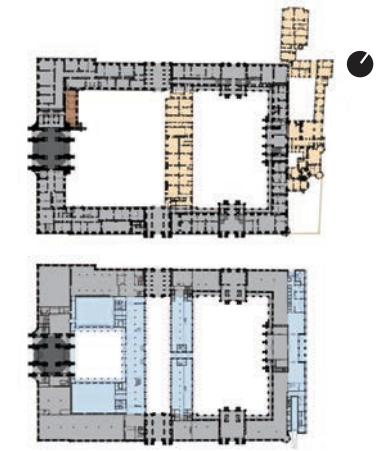
シュブレレー川に面する東側ファサード



断面バース



断面図



上:崩壊前の1階平面図 | 下:再建案の1階平面図

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2021 Arnoldo Mondadori Editore
©2021 Architects Studio Japan

CASABELLA JAPAN レクチャー

現代建築デザイン論 赤坂喜顕

第12回 反近代主義——建築と自然 | 2.風景と素材 [II]

自然界の偉大で崇高なものが生み出す情念は、もしもこれらの原因が最も強力に作用する場合には驚愕となる。驚愕とは或る程度の戦慄を混えつつ魂のすべての動きが停止するような状態を言う。……如何なる仕方によってであれこの種の苦と危険の観念を生み出すのに適したもの、換言すれば何らかの意味において恐ろしい感じを与えるか、恐るべき対象物とかかわり合って恐怖に類似した仕方で作用するものは、何によらず崇高⁴ (the sublime) の源泉であり、それ故に心が感じる最も強力な情緒を生み出すものに他ならない。

エドモンド・バーク『崇高と美の観念の起源』、1757年

[邦訳書：中野好之訳、みすず書房、1973/傍点筆者]

[1——ロンシャンの礼拝堂 (ル・コルビュジエ、1950-55):

^{SUBLIME}
“崇高”の建築]

ロンシャンの礼拝堂、すなわちノートルダム・デュ・オー礼拝堂は、パリ東方のスイス国境に近い街ベルフォール郊外の、起伏に富んだヴォージュ山脈の森と草原を見渡す眺望豊かな丘の頂きに、1955年に建てられました。このカトリックの礼拝堂は、1924年に建てられながら、第二次世界大戦時の1944年に爆撃によって倒壊していたネオ・ゴシック様式の教会の再建計画として、当時、芸術と建築に進歩的な思想をもつケチュリエ神父を介して、ブザンソン大司教区からル・コルビュジエに直接依頼されたものです。[Fig.1]

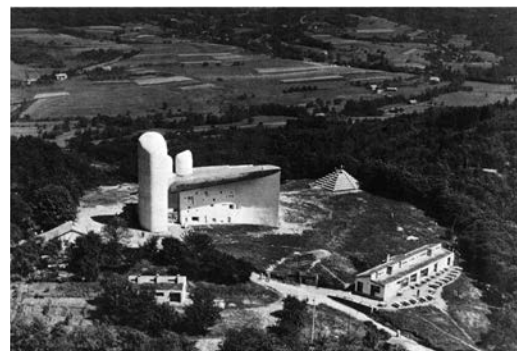


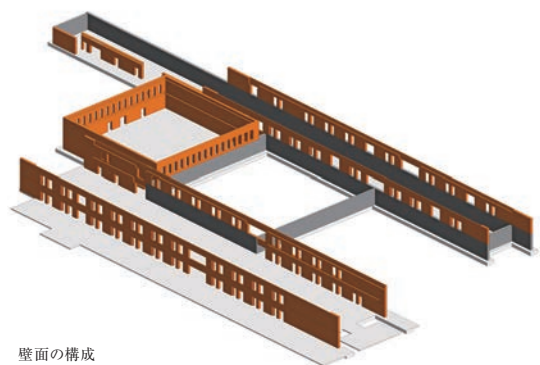
Fig.1: ロンシャン礼拝堂 | ル・コルビュジエ、1950-55 | 南からの全体俯瞰

無神論者であるル・コルビュジエの設計による、この礼拝堂が完成し発表されたときの、世界へ与えた衝撃は極めて大きいものでした。それまでの古典的な直角的幾何学の秩序に基づく、合理的な造形構成を大きく逸脱した、力動的で有機的な非合理的フォルムは、その謎めいた難解さゆえに、近代建築からの“転向”として激しい攻撃を受けました。そして、不幸にも、強引にロマン主義的な表現主義の領域へと隔離されたまま、現在に至っています。当時の批判としては、気鋭の若き建築家ジェームズ・スターリングは『近代合理主義の危機』(1956)とまで述べ、また歴史家のニコラウス・ペヴスナーは『ヨーロッパ建築序説』(改訂新版、1963)の中で、「この理性⁴への反抗⁴は、新しい非合理主義⁴の最も議論⁴を呼んだ作品として、訪れた者に神秘的な感動⁴を与えるが、孤立⁴してはるかな存在である」(小林文治他訳、彰国社、1989/傍点筆者)と諦念を込めて概括していました。[Fig.2]

しかし、この孤立させられていた作品こそ、長いあいだ西洋における古典主義の秩序ある合理性とロマン主義の神秘的な非合理性という、二項対立的な“対概念”の限界を超克すべく、ドイツの哲学者イマヌエル・カント(1724-1804)が『判断力批判』(第1版:1790)において開示した^{SUBLIME}“崇高”の概念を、先駆的に展開しようとしたものです。すなわちロンシャン礼拝堂は、ハイデッガーの言う“不気味なもの”^{u n - g e h e u e r}の起源であるこの“崇高”を、さらにイギリスの政治家であり美学的思想家であったエドモンド・バーク(1729-97)が、カント的な悟性と感性を統合的に再編すべく、「大いさと力」をもつより高次な新概念へと、純化させたものの、おそらく建築表現史上初めての可視化に成功した事例と言えます。その脱近代性すなわち反近代主義的という意味では、当時は未だ成し得なかった現代建築への先端を切り開いた重要な記念碑的作品と言っても決して過言ではありません。今回は、コンクリートの特性である石にない可塑性を限界まで表現した、このロンシャン礼拝堂における新たな^{SUBLIME}“崇高”へ向けた先端性を、詳細な形態分析を通して解明し検証してみたいと思います。

1: 配置・平面計画——草書風の“崩し”

平面計画の構成について見てみましょう。この礼拝堂は、旧い礼拝堂が大戦で破壊された後に、新たに再建されたもので、機能的には単純に“祈り”のための礼拝空間のみを必要とすることから、ル・コルビュジエが開発した「アル



壁面の構成

設計チーム: RPBW: G. Grandi, P. Carrera, A. Peschiera,
D. Piano, Z. Sawaya e D. Ardan; F. Cappellini, I. Corsaro,
D. Lange, F. Terranova; TAMassociati: R. Pantaleo, M. Lepore,
S. Sfriso, V. Milan, L. Candelpergher, E. Vianello, M. Gerardi;
EMERGENCY Field Operations Department,
Building Division: Roberto Crestan, Carlo Maisano
コンサルタント: Milan Ingegneria (構造);
Prisma Engineering (機械・電気・配管設備);
Franco e Simona Giorgetta (ランドスケープ);
GAE Engineering (防火); J & A Consultants
出資者: Paola Coin, RPBW, Fondazione Prosolidar,
Stavros Niarchos Foundation, Fondazione Ravasi Garzanti,
Sergio Lorenzoni ed Eleonora Zanettin
寄付パートナー: Agatos, AGC, Alessio Tubi,
Duferco Travi e Profilati, Enel Greenpower,
Simona e Franco Giorgetta Architetti Paesaggisti, Ingretech,
J & A Consultants, KSB, Maeg, Mapei, Milan Ingegneria,
Milani, Pellini, Performance In Lighting, Perin,
Prisma Engineering, Termoidraulica, Resstende, Safic Alcan,
Santerno Enertronica, Schneider Electric, Schuco, TAMassociati,
Tecnotubi, Theatro, Thema, Zinchitalia, 8×1000 Chiesa Valdese
出資パートナー: Alubel, Atlas Concorde, B Braun,
Cool Head Europe, Doka, Favero, FIAMM, GAE Engineering,
Giugliano Costruzioni Metalliche, Riello UPS, Valsir,
Velux, Zintek.
「エマージェンシー友の会」寄付者: Banor, Barlett,
Casalgrande Padana, Cofiloc, Fondazione Promozione Acciaio,
Fumagalli, Gima, GSA, Leicester, Maspero Elevatori,
MPL Feralpi Group, Polyglass, PPG, Tecnaria, Zanutta
建築主: Emergency NGO Onlus
規模: 敷地面積 148,700m²/延床面積 9,695m²
スケジュール: 設計 2013-16年/施工 2017-21年
所在地: Entebbe, Uganda

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2021 Arnoldo Mondadori Editore
©2021 Architects Studio Japan

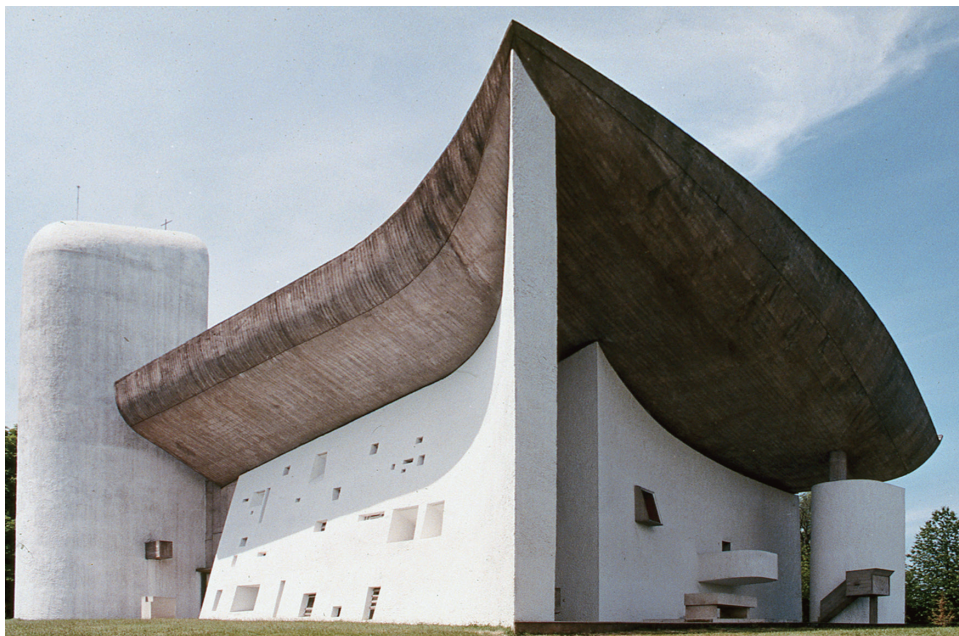


Fig.2:ロンシャン礼拝堂 | 南東からの外観ファサード

ジェ計画」(1930)以来の有機的で流動的な単一形態のバリエーションのみで全体が構成されています。この有機性で統一された単義的な様相ゆえに、ル・コルビュジェが20年代末の「ガルシュの家」(1927)に代表される“白の時代”に共通する純粹幾何学形態を用いた、彼固有の弁証法的な“対位法”のデザインの延長線上にあるラ・トゥーレット修道院(1953-60)と比べても、その概念的強度が一見希薄に見えることは否めません。そして、平面計画の構成は、驚くべきことに、本レクチャーでもすでに指摘したアルヴァ・アアルトのセイナツツァロの町役場(1952)に端を発してラ・トゥーレット修道院まで流れ込む平面構成である“C+I”型を左右に反転した“I+J”型の巧妙な草書風の“崩し”で形成されていることです。つまりアアルトと同時代の50年代に、このロンシャン礼拝堂とラ・トゥーレット修道院が共に同じ“C+I”型の変形体で建てられていたことになります。一切の柱を用いず、曲面壁のみで構成されたこの平面は、建物の中央を貫通する東西方向の主軸(W-E)に乗せて、東側のJ型とI型の壁体が相対峙して挟み込む祭壇のある大きな主祭室を、“J”型つまり反転した“C”型の空間ブロックとして見立てれば、この西側の、南側と北側に2つの主と副の出入口をもつ通路を挟んで、両端に大小2つの第1・第2副祭室を巻き込んで伸びる歪んだ細長い“C”型の壁は、大きくは太い“I”型の空間ブロックと捉えられます。こうして、ここには草書風に

崩された巧妙な“C+I”型の空間ブロックをもつ特異な平面構成が立ち上がってくるわけです。[Figs.3-8]

しかし、草書風に崩されたこのロンシャンの“C+I”型の平面構成は、アアルトのセイナツツァロのような明快な機能分節されたものではなく、2つの周壁に内包された3つの副祭室のうち第1と第2の2つが西側の“I”型ブロックに、もう1つの第3副祭室が“C”型ブロックの北側へと分散配置されています。このような建築計画的に曖昧なゾーニングは、この曲線的な形態言語がもつ相互浸透的で非秩序的な緩さが、形態優先へと流れる勢いに乗って不意に生み出したものかもしれません。そして、同様にこの2つの空間ブロックを秩序づけている西側の大きな“I”型ブロックを形成する細長く歪んだC型の曲壁と、東側の“C”型ブロックを形成する東から北へと折れるL型の曲壁に示されるCとLの字が想起させる頭文字が、ル・コルビュジェ(Le Corbusier)自身の署名(サイン)という興味深い憶測までも生み出すことになりました。さらにもうひとつ付言するなら、南側の厚いJ型の壁もル・コルビュジェの本名であるシャルル=エドゥアル・ジャンヌレ(Charles-Édouard Jeanneret)のJを仄めかしているのかもしれませんが、それでもこの“C+I”型の平面は、南の主入口側の外陣から右奥の内陣へと向かう正確な東西軸を主軸(W-E)として、これに対して北側の2つの第2と第3副祭室に挟まれた副出入口と南側の主出入

口を結ぶルートを、正確な南北軸である第1副軸(N-S)を微妙に振ってずらした第2副軸(N'-S')とする、明快な2軸構成の伝統的なカトリックのバシリカ式長堂平面を下敷きにしていることは、歴史的規範を最後まで順守しているル・コルビュジェの慎重な姿勢を見事に示しています。

そもそも、日本の言語表現文化における、草書体の“崩し”とは、厳格な幾何学的構図による静的に分節された記号的な楷書体に対して、これをその硬直的な静性を破って、緩やかな膨らみのある力動的な“流れ”へと変質させようとしたものです。この言語における“崩し”をテーマとする表現の起源は、おそらく平安時代のひらがたと漢字の共存にあります。日本特有のひらがなは、古典文学においては“たおやめぶり”という女性的表現手段の典型として用いられ、これに対して中国由来の漢字は、“ますらおぶり”という男性的表現手段の典型として用いられてきました。平安の王朝時代に女流文学者の紫式部は漢文学を熟知していましたが、『源氏物語』をあえて、ひらがなですべて書きました。これは柔らかなひらがなのほうが、固い記号的な漢字にはない、その弾力的膨らみや広がり、そして多義的な暗喩性において、男女間の感情の微妙な起伏や繊細な揺らぎの表現効果に適していたからです。草書風の“崩し”がひらがたと漢字の合成と考えれば、非限定的な暗喩的な多義性を内包したこのような文字群が、川のように流れる連鎖的な連なりこそ、その相互浸透的な通態性において、終わりのない文脈の構造を可能にしました。そして、和洋を問わずこのような草書風“崩し”文字が、直線状のオープンエンドに開かれた構成において成立する表現効果に対して、これらを円環状に閉じて完結した構成へと再編成すれば、その表現効果は一変します。そこでは相互浸透の流れが、力動的な渦のような終わりのない回転運動を誘発するからです。ロンシャン礼拝堂における、英字を草書風に“崩し”た大きな“C+I”型の平面構成は、JとLとCの字型の壁が相互に離接して分節されながら、応答して囲い込むその緩く閉じた構成において、この力動的な様相を喚起したのは当然です。

2:草書風“崩し”の構造

草書風に崩された、これらJとLとCというJeanneretとLe Corbusierを仄めかしている3つの字型をもつ壁で構成された平面計画の構造について、さらに詳細に見てみましょう。まず南側の厚いJ型の壁は、南側の坂からのア